

中華人民共和国

派遣期間 2014年4月～2017年3月

上海日本人学校浦東校 実践報告

～異文化の風に吹かれて～

函館市立深堀中学校
教諭 山下 雅史

1 中華人民共和国・上海市について

中国は日本と同じ東アジアに属する国の一つである。しかし面積は963 km²で日本の約25倍、人口ではおよそ13億人で日本の約11倍。規模としては世界でも有数の大きな国である。中国は、悠久の歴史をもつと言われ、その年月は4000年とも言われている。そのため、北京郊外の万里の長城、西安の兵馬俑、敦煌の莫高窟に代表される建築物をはじめとした世界遺産が数多く点在している。また、古くから日本と密接な交流で日本に影響を与えていたが、そこからさらに進化をとげ、独自の東洋文化を成熟させてきた。最近では領土問題などでお互いの主張が合わないことがあるが、それぞれの考え方を尊重しながら戦略的互惠関係を模索しているところである。

上海市は中国の東方に位置し、東には東シナ海、北には長江と接している地理関係にある。世界有数の都市であり、中国の商業、金融、工業、交通などの中心の一つをなしている。常住人口は2400万人を超えており、世界第6位を誇る。2016年に在留邦人数がロサンゼルス、バンコクについて世界第3位の46000人となっている。



2 上海日本人学校浦東校の特色

(1) 概要

上海日本人学校浦東校は、上海市の中心部より黄浦江を隔てて東側の浦東開発地区に位置している。浦東開発地区には多くのビルが立ち並び、私がいた3年間のうちにも景色がどんどん変わるほど発展が加速している地区である。昔から日本人が多く住んでいたのは上海の中心部より北側の虹口地区であった。1987年に開校した上海日本人学校は虹橋地区に建てられた。2000年を過ぎ、徐々に浦東開発区に住む日本人も増加し、2006年4月に浦東校が新設された。当時は平地に囲まれていた浦東校だが、この浦東開発地区の発展とともに日本人が住む公寓（マンション）も増え、校舎のまわりを囲むようになった。2010年4月には新校舎も完成し、2011年4月には同校舎に高等部も設立された。

現在、虹橋校には虹橋地区側（西側）に住む小学生約1100人が通っており、浦東校には浦東開発地区（東側）に住んでいる小学生約650人と上海市全体に住む中学生約350人、合わせて



1000人の児童生徒が通っている。虹橋地区に住んでいる中学生は各自契約したバスや保護者の車で約1時間かけて学校に通ってきっていたが、上海市の指示により、2015年1月より完全個人通に、そして2015年度より校車バスで通学することになった。

(2) 上海日本人学校の実践（教育課程）

校訓……「独歩博愛」

学校教育目標 「自ら学び 明るく やさしく たくましく、国際性豊かな児童生徒の育成」

①学力の向上 ②国際理解教育 ③小・中併設に重点を置いた教育課程の編成

①学力の向上

- ・小学部の教科担任制（音楽・図工：小1～6，理科：小3～6，書写：小1，家庭：小5・6）
- ・きめ細かな指導：英会話・中国語の少人数指導
- ・基礎基本を定着させるドリル学習…（小 ドラゴンタイム 中 マルチタイム）
- ・本に親しむ時間 全校一斉の「朝読書」の時間

②国際理解教育 ～国や言葉を越えた交流をめざして・一人ひとりが日中の架け橋に～

上海日本人学校の教育目標は「自ら学び 明るく やさしく たくましく、国際性豊かな児童生徒の育成」であり、開校以来、国際理解教育に重点が置かれている。

学校経営方針に「在中国・上海の特性を生かし、中国や上海の環境や人材を学習活動に取り入れ、現地校や国際学校との交流を通し、中国理解や人間理解、自国・自己理解を深め、共生の精神と国際性豊かな児童生徒の育成を図る」と強く打ち出し、特色ある教育活動の目玉にしている。

A：語学授業（英会話&中国語）

現地上海の教育事情の影響もあり、語学の習得に対する保護者からのニーズが高い。このことを受けて、中国語と英会話を全学年で実施するなど海外日本人学校ならではの特色も取り入れられている。

英会話… 小学部1年から中学部3年まで全学年において英会話の授業を実施している。小学部においては、歌やゲームなどを中心に楽しみながら英会話に親しむことをねらいとして授業を進めている。中学部においては、通常の英語の授業を補足するアウトプットを中心に英語のネイティブスピーカーの講師が授業を行い、授業は全て英語で進められる。

中国語… 小中全学年で中国語の授業を行っている。子どもたちの中国語の会話のレベルは様々であるので、全学年で4～7展開の習熟度別の少人数指導を徹底している。指導は日本語ができる中国人教師によって行われている。

近年、中学部卒業後の進路で、現地のインター校への進学を希望する生徒が増加傾向にある。これまでに同じ学校を受験した諸外国（中国、韓国など）の生徒たちの英語によるコミュニケーション能力の高さを見せつけられた本校の卒業生も少なくない。彼らに負けない語学力を身に付けるために必要な力は、「日々の積み上げ（継続）」である。本校での取り組みが、語学力向上の一端を担っている。

B：現地校交流

上海日本人学校では開校以来、上海の現地の小・中学校（以下、現地校）との交流がある。「人と人のふれあい」を通じた交流が世界に目を向け、グローバルな視点で物事を考えることができる児童生徒の育成につながっている。また、現地校との交流では身近な遊びや歌を通して、日中の文化の類似点や相違点に気づかせ、同時に日本と中国との様々なつながりから、よりよい国際関係を考え、深めている。

小1～中3の全学年が、現地校9校と発達段階に即しての交流活動を実施し、各学年、年に1回、1・2学期を中心に有意義な交流活動（訪問・招待）を実施している。

C：中日スピーチ大会

将来、中国と日本の架け橋となる子どもが育ってほしいという願いのもと、1997年より日中国交正常化25周年を記念して始められた本大会は昨年度20回の節目の年を迎えた。この行事は日本人学校主催で、4～5校の現地中学生を招待して行う伝統的な行事の一つである。日中の生徒が互いに相手の言語で意見発表を行い、日頃の練習成果を披露する絶好の場であると共に、互いの文化や歴史への理解を深める機会でもある。過去の歴史や政治的な部分で問題が絶えない中、若者たちの思いは建設的でうれしい気持ちにさせられる主張ばかりである。

また、スピーチに合わせた中国語（日本語）の字幕、閉幕式での中学部全員による学部合唱や在上海日本国総領事館のご講評等、内外から高い評価を得ている。

D：中国大陸を歩く！ 宿泊学習&修学旅行

本校では、今昔の人々の暮らしや芸術、地理、気候風土に直接触れ、歴史・文化の息吹を求める「百聞は一見にしかず」の中国国内旅行を実施している。

- ・小学5年生 1泊2日による、上海市内の「東方緑舟」での宿泊学習
- ・小学6年生 2泊3日による、北京への修学旅行。
- ・中学1年生 1泊2日による、上海市内での宿泊学習。
- ・中学2年生 2泊3日による、無錫・蘇州への宿泊学習。
- ・中学3年生 2泊3日による、成都・樂山への修学旅行。

その他、小1～小4は、上海市内の動物園、植物園、水族館等、校外学習で校外へ出る機会が、年に2～3回はある。

E：中国の芸術・文化鑑賞 ～チャレンジタイム（PTA主催）～

PTA活動のひとつに子どもたちに「中国の音楽や文化、芸術を鑑賞・体験してもらおう」という活動があり、小学部は低学年・中学年・高学年、そして、中学部と4つの年齢差に分けて開催しているが、近年は日系企業に来てもらい参加型の授業なども行うようになってきている。

F：教職員の研修（現地校訪問と本校招待）

在外にいるという機会を利用し、本校教員は地元の小学校や中学校を訪問し、授業参観や意見交換や質疑応答を行っている。ここ数年、上海市政府は国際教育を前面に押し出した教育政策を進めている。現地の学校事情や教員の価値観、さらには中国の人々の生活習慣や考え方で、幅広く理解することができる教職員交流になっている。

③小・中併設の利点を生かした教育指導

A：小・中合同の学校行事（入学式）

児童生徒数の増加により，平成25年度からは入学式も運動会も小学部と中学部が別々に開催していたが，年齢差を超えた縦のつながりは人間形成の上で大切であるという観点から入学式がH28年度より再び合同開催となった。

B：6年生の中学部授業・部活動の見学

C：中学部による小学部低学年生自児童への読み聞かせ

D：漢検・英検の共同実施（外部委）

E：放送委員会等の活動。など

(3) 人間関係を軸に進める学校教育

日本人学校は海外に赴任される時に，子どもたちが日本と同じように学習できるように，そして，帰国時に編入・進学等がスムーズにできるように，日本と同じ教育を求めて設立されたものである。しかし，日本の公立学校とは明らかに違う点がある。それは子どもたちの国籍や出身地域も，保護者の職業も考え方，価値観も多様であるという点である。子どもたちは長い者で9年間以上，短い者でも数ヶ月の海外生活を送っている。日本で生活をしたこともない子どももいる。このように多感な思春期にいる子どもたちにとって，日本人としてのアイデンティティの確立は大きな問題である。児童・生徒の中には，学びから逃避する者，情緒不安定になって倫理観を見失う者など，反社会的，非社会的な行動をとる子どもたちも少なからずいる。そのことは，子どもたちは多くのストレスを抱えて，学校生活を送っている現れではないだろうか。そんな中，上海日本人学校では教師が子どもたちに寄り添い，人間関係を軸として進める学校教育を進めている。

3 上海における教育実践 ～現地校の教授法を取り入れた授業実践～

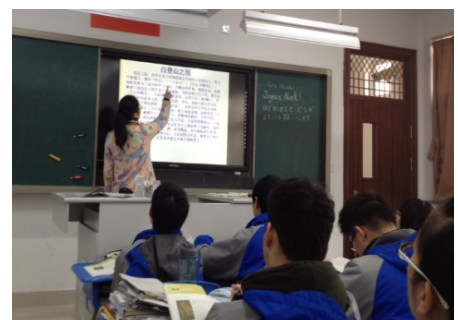
(1) 中国での社会科教育について（調査結果）

①上海川沙中学での授業見学（H27年12月）

平成27年12月に上海川沙中学の歴史の授業を見学。

A：ICTの活用

教師が備え付けのPCを使用し，デジタル教科書による授業を展開していた。黒板とICT機器が併用されていて非常に見やすかった。



B：ペアワークの活用

授業中に何度もペアで話し合う場面を設けていた。言語が中国語のために、わからない部分も多かったが、単に知識の確認をするのではなく、設問に対して自分の意見をもつことが重視されるような発問だと感じた。



C：宿題の活用

授業の最初は宿題の解答から始まったが、宿題の内容も知識だけを問うようなものではなく、持っている知識を使って表現するタイプの宿題であった。思考力を育てるとともに、宿題の答え合わせの段階から生徒同士の学び合いがみられる授業だった。

D：自主的に調べ、意見を交換する授業の組み立て

講義型で教師が話す場面が多くあったが、講義中に生徒に問いかける場面では生徒が意欲的に自分の考えを述べていた。

②上海市進才中学国際部の社会科教師へのインタビュー（H 28年3月）

3月の春季研修の際に、インターナショナル校の社会科教師 Jason へのインタビューをし、そこから多くのことを学んだ。



A：小人数での授業

社会の授業は選択制で生徒数が少なく、発言しやすい授業を心がけていた。また、授業後に訪れた日本人生徒の話を聞くと、宿題の内容もレポート形式が多く出るとのことだった。小人数だからこそ丁寧な対応が可能だと感じた。

B：考えさせる授業

授業中も教科書を参考書代わりにして、考えさせる問いを多く出すとの話を聞いた。とにかく考えさせたいと話していたのが印象的だった。



C：発言を求める授業

「B：考えさせる授業」からさらに進めて、思考した内容を「表現すること」に重きを置いていると学んだ。表現するためにはしっかり調べて根拠をもたなければならないし、自信をもつ必要がある。そのために宿題の質にもこだわっているという話を聞いた。

③リビングストーンインターナショナル校での授業見学及び社会科教師へのインタビュー（H 29年1月）

H 29 年 1 月にリビングストーンインターナショナル校に歴史の授業を見学しに行った。



A：生徒が授業教室を動く

教室が固定されていて、生徒が移動して授業を行うスタイルであった。メリットとして、教室を社会科教室にでき、地図の掲示などで視覚に訴えることが容易になっていると感じた。また、教師の授業の準備も容易になっている。

B：予習課題を宿題にする

予習を義務付けることで、授業中に考える時間を確保している。また、1コマの授業時間も90分と長く、これによってより深く学ぶことができると考える。

C：ICTの活用

見学当日は日本についての授業だったが、地理から歴史までを網羅している授業で、その際に自作のパワーポイントを使用していた。授業後のインタビューからすべての教材に関して自作資料を使い、わかりやすい授業を心がけていることがわかった。

D：基本的にはチョーク&トークで教師が話し、知識を伝えていくが多かったが、随所に生徒に意見を求める場面があり、生徒たちの考える力の育成につながっていると感じた。

(2) 日本人学校同僚との授業研究 (H 28 年 6 月～H 29 年 3 月)

私は大規模校に務めることができたので、同僚(中学部社会科教師)と授業を公開しあうことで、授業力の向上を図った。以下にその時の取り組みをまとめた。



①形態

4人で毎週必ず誰かが公開し、それを他の3人が見るという形式をとった。その際、過度の負担にならないように指導案は作らず、生徒の立場で授業を受けることとした。また、授業で批判しあうのではなく、「どこが学びにつながったか」「どこにつまづいたか」という点に特化し、授業を見あうこととした。

②めざしたもの

上海の幾つかの学校を見学した経験から、「生徒が自主的に学ぶことで得られる学力」をつけるために、「学び合い」ができる授業をめざした。

③学習の形態

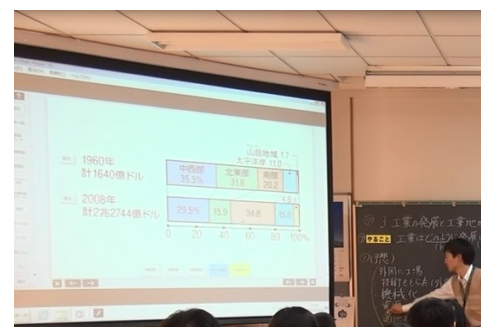
授業に必ず班やペアでの「学び合い」を入れることとした。

④得たもの

授業を公開し、研究討議を続けていく中で、様々なことがわかった。

<教師側として>

- 社会的な思考力・表現力を深化させていくためには、その前提として知識が必要なこと



- 知識は曖昧なものではなく、語句の意味などもしっかりと理解する必要があること
- 知識を得るためには生徒がその知識を得たいと思わせる課題設定が重要であること
- 課題設定には教師がその授業や単元で生徒にどんな力をつけさせたいかを明確にもつこと
- 学び合いを実現するためには教師が明確な意図をもつこと

<生徒側として>

- 話し合いのルールを決めることで話し合う力が向上した
- 選択する資料を限定することで資料を読み取る力が向上した
- 毎回、用紙にまとめることで、時間内にまとめる力が向上した
- 毎回、発表をすることで、発表する力が向上した
- 学び合うことで、学力の向上につながった



4 暮らしを多面的に見てみよう！

中国は長い歴史をもつ国であるがゆえ、様々な独自の文化が古代より受け継がれている。それとともに急速な発展に伴い、一度国民に受け入れられたら便利なものなどは、ものすごいスピードで広がっていく。ここにそのいくつかを紹介したい。

①太極拳



多いところで100人くらいの集団が、様々な公園で太極拳に親しんでいる。スローな動きなので一瞬お年寄り向けの健康体操という錯覚に陥りそうだが実際に体験してみるととても筋肉を使うため、すぐに筋肉痛になってしまう。意外とハードな拳法である。

②上海雑技団

有名な文化の一つである。想像を超える多くの技で、たくさんの人を魅了し続ける彼らは、毎日の厳しい練習と競争を乗り越えてきている。また彼らの演技は、瞬きをするのを忘れてしまうほど凝視してしまう。



③花火

中国人は大の花火好きである。正月、国慶節などの慶事時期になると花火を打ち上げ、お祝いムードをより高くする。日本で打ち上げ花火となると、周囲の状況に最大限配慮しながら上げることが多いが、彼らにそのような意識は全くない。ビルの間、道路の真ん中、公園の中など、自分があげたい時間に上げたい場所で上げたい花火を思いっきり上げるのである。一番激しく花火が上がるのは旧正月。この日は、11時30分くらいから少しずつなり始め、12時を過ぎると一斉にドンドン始まる。しかしこれは空気浄化などの問題から2015年より禁止となった。

④乗り物

少し前まではバイクや電気自転車が主流であったが、ここ1～2年でどこでも乗り降り自由のレンタル自転車が爆発的に普及した。便利な点は停留所ではなくどこでも乗り降り自由で30分20円程度で利用できることである。便利さと安さから爆発的に広がり、その後、多くの会社が参入した。最近では電気自転車や自動車もあるという話であるから驚きである。中国人の柔軟さを感じたのは各会社は特に「環境に優しい」とか「排気ガスを減らそう」とは謳っていないが、便利であるという間に広まるところである。結果地球温暖化や排気ガス問題にも貢献できるという優れたものである。



⑤電気自動車

日本では乗用車に採用され始めた電気自動車であるが、上海では公共交通機関のバスにも採用されている。音も静かで環境に優しいからなのか、この3年間でみるみる広まった。

5 おわりに

憧れであった日本人学校での勤務は何物にも代えがたいものとなった。もう2度と経験することのできないと思っている位大きな財産でもある。今回の上海日本人学校浦東校勤務での学びを報告したい。

(1) まずは『チーム作り』

1年次の4月から、毎日のように夜ご飯に誘われた。海外に住む日本人という閉鎖社会での特殊性もあったことは間違いない。しかし、同じ職場ではたらく同僚の誰とでも仲良くやっけて行こうという大きな「チーム作り」が大切なことを学んだ。22歳から63歳まで、男女問わず、北は北海道から南は九州・沖縄まで、小学校中学校教員や事務職員の別なく、いろいろなバックボーンをもった同僚たちが小さな内輪で固まることなく、より多くの職員と接する機会を求めた。その結果、職員数80名近い個性豊かな職員は、常に同じ方向を向いて職務に当たることができ

た。

(2) 『ねらい（何のために）の重要性』

小中高が同居する上海日本人学校では、児童生徒数が多いこともあり、施設は充実していたがやはりなかなか自由に使うことのできない制限はあった。そのため、行事やその他の教育活動について、「何のために」行うのかということのを常に問われた。1年後や3年後の生徒の着地点を考えたときに、今からやろうとしていることは本当に必要なのか根本的な理由を求められた。そのため、毎日が1～3年後を見据えての教育活動になっていた。各学年とも毎日日報を配付し、何のためにやっているかを理解しながら仕事を行うことが出来た。日本にいと、目の前にたくさん問題があるにも関わらず、色々なことに時間を奪われ、やらなければならない教育活動にさく時間が極端に少ない。本当に大きな課題であると考えている。

(3) 教科研修

教科研修ではやる気にあられる同僚たちと日々学びあうことで、現在、日本でも盛んに行われているアクティブラーニングにもつながり、生徒がより高次に学び合うことになった。1年間の調査・研究を通して、生徒が自分自身の言葉で、根拠を明確にして発言することができるようになっていった。確かな知識をもとに、思考・表現することをくり返すことで学力も向上したと考える。

今後も生徒の学力向上のために、この上海で学んだ教授法を日本で出会う生徒にあったものに改良を続けながら、研鑽を積んでいきたいと考えている。

(4) 国際理解教育とは

上海日本人学校では、「国際理解教育」についての研修が何度かあった。その度に、一体「国際理解教育」とは何だと話し合いを行った。「英語を話せること」ではないかというような内容から出発し、話し合いは毎回迷走した。そして、到達した着地点は、「異文化を知る」ということだった。本当は、「異文化を理解する」に落ち着きかけたが、どうしても理解しがたい文化もあり、「異文化理解」という結論には至らなかった。

現在、日中関係は大きな問題を抱えている。しかし、日本人で中国人の考え方や文化を知っている人は、ごくわずかである。我々上海日本人学校教員のほとんどが、中国を好きになり中国人を好きになった。それは、中国や中国人の考え方や文化を知ったからである。マスコミによってつくられた思想を覆すことができたこの経験は何物にも代えがたい。お世話になった中国人のためにも、一生をかけて中国人の良さを伝えていきたい。

(5) 余暇と仕事

3年間生活する中で、多くの中国人や上海に駐在する欧米人と接することが出来た。彼らのライフスタイルは、仕事だけでなくプライベートも実に充実していた。こんなに余暇を楽しんでもよいんだという衝撃を受けた。余暇が充実すれば、仕事も充実することを学んだ。

(6) 最後に

在外派遣という機会を与えて頂き、貴重な体験を積みさせていただけたのも、文部科学省を始め北海道教育委員会、函館市教育委員会、当時の原籍校、国際理解教育研究会の皆様の大きなご指導、お力添えによるものであると思う。このような機会を与えて頂いたことに心から感謝いたします。本当に貴重な体験をすることができました。厚くお礼を申し上げます。